現代中国における清明節の復活
——共産党政権の文化政策における祖先祭祀の位置づけについての考察

エリック・シッケタンツ

1. はじめに

2008 年 2 月に、筆者は東京大学の死生学プログラムと中国の中華日本哲学会が共催した、「東アジアの死生学へ」という学会に参加した。この学会では、日本と中国における死生観が議論された。中国における死生観についての発表は主として、道教や儒教の経典に基づいて、哲学や思想史といった観点からなされた。むろん、これらの経典に代表される思想は中国の死生観の重要な背景となっているが、哲学の観点からだけでは現代中国における死生観を理解することはできない。北京の学会においては、特に二つの重要な要素が議論の上で欠けていた。それは、民間における実践と国家の影響という二つの要素である。

死生や他界が如何に観念されているかは重要な問題であるが、実践に注目し、死生観と他界観が具体的にどのような形で具現化されているかに着目した論点も重要である。中国の死生観に関する実践において、民間信仰は中心的な役割を果たしている。民間信仰は、儒教や道教などの経典といろいろな形で接しながらも、多少異なる死生観を示している。

また、北京の学会では現代中国における死生観の形成に対する国家の影響力についても取り上げられなかった。1949 年の共産党政権の成立以降、文化に対する介入が新政権の重要な政策となり、国家が文化空間の変質を図っ

てきた[1]。1949年以降、伝統文化は中国の社会主義化と近代化の障害になるものとして批判されてきたが、1978年に改革開放政策の時期に入ると、社会における伝統文化の漸進的な復活が見られるようになる。しかし、この伝統文化の復活は、決して国家の文化空間に対する統制の終結を意味しない。逆に、改革開放期以降、国家の言説上、階級概念がその重要性を失いつつあると同時に、「文明」概念と社会の「文明化」が共産党政権の正当性を支える中心的な位置を得てきたのである[2]。現代中国において、「文明」という概念は主に文化の近代化というニュアンスで使われている。死生観に関する葬儀習慣などの実践も、当然この文明化政策の対象となっているため、国家は現代中国における死生観を考える上で重要な要素であるといえる。以下では、具体例を取り上げながら、国家の文化政策という側面から、国家と実践という二つの次元が如何に交錯しており、死生観の形成とどのように関わっているのかいう問題について考察したい。

具体例としては現代中国における清明節を取り上げる。北京の学会に参加した2008年は、伝統的な年中行事の一つである清明節が初めて法定の休日となった年でもあった。清明節とは、漢民族の祖先崇拝における重要な行事で、墓参が行われる。清明節は、2007年に法令によって全国の法定休日として指定され、国家の規範的な公式の文化として復活した[3]。2008年、北京で60万人以上が清明節の墓参を行い、上海では237万人が参加したとされる。中国の民政部（日本の厚生労働省に相当する行政機関）によると、2009年は全国で4億人が墓参したとされ、前年に比べても増加が指摘されている[4]。共産党政権成立以降、祖先崇拝が中華人民共和国において長い間迷信として批判されてきたことを考えると、これは注目すべき出来事である。祖先崇拝の重要な行事である清明節は、現代中国における死生観に対する国家の役割と実践の重要性を考察する上でよい手がかりになるであろう。

近年、中国政府の伝統文化に対する態度に変化が見られる。伝統文化を否定した以前とは異なり、伝統文化を積極的に利用しようとする共産党政権の姿がうかがえる。清明節の法定休日化もこの新しい文化政策の一部である。しかし、この新しい政策は伝統文化に対する見方の実質的な変更を意味して

いるのであろうか。また、清明節が法定休日になったことは、共産党政権が祖先崇拝を承認したことを意味しているのであろうか。これらの問いに答えるため、以下では中国共産党の文化政策における清明節を分析し、特に規範的な公式文化としての清明節の復活におけるイデオロギー的背景に注目したい。イデオロギー的背景を究明した後に、公式文化としての清明節において、祖先祭祀がどのように扱われているのかという実践的な内容に関する問題に論を進めたい。本論文は中国政府の文化政策における清明節の位置づけに焦点を絞る[5]。現代中国における死生観は先行研究においてまだあまり注目されていない課題である。したがって、本論文はこの問題についての最終的な結論を出すものではなく、現代中国における死生観を形成する諸要因を調査するというプロジェクトの第一歩として位置づけられるべきものである。

中華人民共和国における葬儀文化と祖先崇拝に関する先行研究を見ると、1980 年代に行われた研究は、都市部の中国人の他界観と死生観の根本的な変化を指摘し、国家が唱えている唯物主義的世界観が普及したということを主張している。これらの研究では、伝統的な他界観とそれに伴う実践の消滅が指摘されている[6]。Whyte と Parish の「墓における永続的な祭祀活動に対する願望が消えつつある」という指摘は、この観点を代表しているものといえる[7]。

しかし、近年の清明節における活発な様子を眺めると、上記のような指摘とは随分異なる現状が目につく。清明節の際に、北京や上海などの大都会でも膨大な数の人々が墓参を行っていることからすれば、祖先崇拝は現代中国において決して失われた伝統ではない[8]。国家の唯物主義的な死生観の勝利を唱えるにはまだ早い。

以下ではまず、清明節の諸習慣を取り上げ、その上でこれらの習慣と民間信仰における他界観との関係を簡潔に紹介し、共産党政権成立以降の文化政策における位置づけについて触れたい。

2. 改革開放期までの清明節の概観

清明節は、漢民族の重要な伝統的年中行事の一つである。清明節の起源として農業との関連などが指摘され、その歴史的背景は多様であるが、現代中国に見られる清明節にとって、唐代以降に盛んとなった、清明節における墓参の習慣が重要である。[9] 現在の中国文化圏では、西暦の4月5日前後が清明節の日とされ、祖先の墓に参る習慣が見られる。具体的には、墓参において如何なる祭祀活動が見られるのであろうか。

歴史資料に現われる清明節のいくつかの例を挙げると、明代後期の『帝京景物略』は清明節を、「三月、清明の日は、男性も女性も祖先の墓の掃除をする。(手には) 酒饌の供え物を持ち、かご車を引く馬のしりえに楮錠 (馬蹄銀形の紙銭) を引っ掛けて行き、道は笑顔の人々で溢れる。人々は拝んだり、祭祀のため地面に酒を注いだり、泣いたり、墓の草を取り除いて (墓の土饅頭の) 土を足したりする。楮錠は焼いて、紙銭を墓の上に置く」と記述している。[10]

また、中華民国期1922年の河北省文安県の地方志においては、「(清明節の祭) 数日前、吉日を選び、(祖先の) 墓の修理を行う。これは添墳と呼ばれる。選んだその日になると (墓の前で) 祭祀と掃除をする、爆竹を鳴らす、冥界の紙銭を焚く、四拝礼を行う、自分は火を使わず (他から) 火を貰う、という各習慣が行われる」という描写が見られる。[11]

このような墓前で行われる習慣は、現代中国語で、「掃墓」や「祭掃」とも呼ばれ、墓における祖先崇拝の習慣を意味するものである。掃墓の諸習慣のみならず、清明節は昔から出遊の機会としても知られ、人々はピクニックをしながら、郊外で一日を過ごすといった側面も持っている。この習慣は「踏青」と呼ばれ、「放箏」(凧あげ) や「蹴鞠」などの屋外の遊戯と行楽が行われた。[12]

本論文にとって特に重要な習慣は、上記の資料にも登場した、祖先の墓の前で紙銭 (儀礼用の金銭のこと) を焼くという習慣である。これは一般的に

「焼紙」と呼ばれ、紙銭のみならず、紙製の祭品（召使の人形、家の模型等）を燃やすことによって、これらを他界にいる祖先たちに送るという習慣である。[13] これらのものを「冥幣」と「冥品」ともいう。

焼紙は民間信仰の他界観と密接に結びついている。文化人類学者の渡邊欣雄は中国民間信仰における他界観を次のように描いている：「「あの世」（陰間）のために「この世」がある。だから「あの世」のために「この世」の生き方・死に方を整える」。[14] 現世と他界の間には積極的な交流関係が存在している。他界（陰間）は現世（陽間）とよく似ているとされており、死者たちは陰間の生活においても、お金や住宅、車などのものを必要とすると考えられている。陽間と陰間の間では、生者と死者にとって重要な交流が行われている。生者がこの交流から得ようとする「子孫の繁栄と幸福、それは回り回って死後自分を定期的に祀り、あの世へ材料を送ってくれる他界福祉の奉仕者を安定的に確保することにつながる」と定義されている。[15] 生者の繁栄のみならず、この交流は死者にとっても重要な意義を持っている：「祖先界への生活資材の供給をおこないつづけなければ、祖先でありつづけることができない。……祖先の資格条件を欠くならば、やがて別の存在へと変化してしまう。すなわち鬼魂への変化である」。[16] したがって、供給手段である焼紙の習慣は葬儀と清明節などの祖先祭祀にとって不可欠なものとなっている。[17] 焼紙に反映されているのは、他界の存在を前提とする、生者と死者の相互関係に基づく死生観であると総括できよう。

以上、共産党政権成立以前の清明節の習慣とその背景となっている宇宙観を簡単に紹介した。近年における清明節の公式文化としての復活を理解するためには、1949 年以降の中国の清明節についても述べなければならない。共産党政権下の中国では祖先崇拝が迷信とみなされたため、清明節も国家によって否定されていた。[18] だが、共産党政権は清明節を単に承認しなかっただけではなく、清明節の文化内容を積極的に変更しようとする文化政策を採った。この文化政策によって、清明節は家庭の死者たちを祭る行事ではなくなり、革命烈士を追悼する「烈士記念日」となった。このような伝統文化の

占有は、当時の共産党政権の新しい社会を作るための重要な文化政策であった。革命烈士記念日の際には、革命烈士に対する感謝が表されていた。各家庭の祖先は子孫と血脈でつながっているのに対して、烈士たちは党に対する忠誠を通じて中国民衆とつながっているとされ、重視されていた。[19] このように、共産党政権の成立以降、清明節は家庭内の祖先崇拝の年中行事としてではなく、国家と新しい政権に対する忠誠を宣伝する行事として位置づけられたのである。

1978年以降、改革開放の政策に入ると、政府の伝統文化に対する態度も変わり始めた。以前と比較すると、民間において清明節が行なわれることに対する態度が柔軟となった。背景の一つには、清明節を重視する海外の華人たちの資本投資を招くという期待があったようである。だが、政府の伝統文化観自体も変化した。改革開放期以降、言説において「習慣」と「迷信」が区別されるようになり、伝統文化を部分的に「習慣」として評価するという新しい文化観が生み出された。[20] また、1980年代から、中華民族の始祖とされる黄帝の祭祀が清明節の時に行われるようになった。[21] 清明節などの伝統行事に対する見方が変化したとはいえ、それは、国家の清明節に対する積極的な承認にはつながらなかった。また、伝統文化を習慣としては評価するが、清明節の革命烈士記念日の機能が依然として重視されていたのである。[22]

以上の態度は、こんにちの伝統文化に対する政策において、その歴史的な背景として継承されている。この意味において、清明節の法定休日化は突然定められたものではなく、改革開放以降の伝統文化観の発展したものとして理解すべきである。だが、清明節における家庭の祖先祭祀が、改革開放期に入ってから、民衆の間でますます復活してくるのに対し、共産党政権は近年になるまで革命烈士記念の機能以外は、清明節を国民的な行事として承認しようとしなかったのである。[23] 1980年代および1990年代を近年と比較すると、伝統文化を積極的に文化政策の中へ取り入れる試みは、新しい展開として注目に値する。

以上、国家の伝統文化に対する見方の変更を指摘したが、この発展の具体的な過程はまだ明らかでない。なぜ近年になって清明節が法定休日となった

のか、そして共産党政権がどのような清明節を社会に植えつけたいと考えていたのかという問題の具体的な背景は、まだ明らかになっていない。

3. 公式文化としての清明節とその思想的背景

以下ではまず、法定休日化までの過程を政府機関の公文書に基づいて述べた後、民政部、文化部、中央文明辦等の政府機関[24]が提供する資料を参考にして、中国政府の清明節観を紹介し、分析したい。

清明節は 2007 年 12 月 14 日の中国国務院令 513 号「国務院関於修改「全国年節及記念日放假」的決定」により、中国全体の休日となった。清明節と共に、端午節と中秋節などの伝統行事も同じ資格を得た[25]。2008 年の 4 月 4 日に、清明節は初めて法定休日として実施された。また、法定休日となる以前の 2006 年 5 月 20 日、国務院は清明節を「第一批国家級非物質文化遺産名録」に含み[26]、このことからは、国家の清明節に対する注目の度合いの強化がうかがえる。また、伝統文化に対する政府の再検討と積極的な評価が見られる。

清明節の法定休日としての制定に対する最も重要な要因は、中国共産党の伝統文化に対する態度の変更である。この伝統文化に対する態度の変更はさらに、中国共産党主席胡錦濤が唱えた「和諧社会」概念と深く関連している。伝統文化は社会の分離を妨げる精神的な接着剤として機能するとされている。この期待は、清明節において行われる祖先祭祀にまで及んでいる。

以下で詳細な分析を通じて示すとおり、中国政府は、和諧社会建設に関連して、清明節に対して次の三つの大きな期待を抱いていると考えられる：

1. 増大する経済的・社会的分裂を調和させる共通文化として機能すること。
2. 家庭の次元と国家の次元を統合し、全社会をつなぐ「祭祀共同体」を創造すること。
3. この「祭祀共同体」の具体的な感情的内容として、祖先、革命烈

士と黄炎両帝に対し恩義を感じる気持ち（「感恩」）を社会に植えつけること。

公式文化としての清明節におけるイデオロギー的背景：伝統文化の再検討と和諧社会概念

特に2000年代以後は、伝統文化に対する政府の認識が高まった。たとえば、2002年の中国共産党第十六次全国代表会における報告において、当時の中国共産党主席江沢民が文化政策に言及した箇所で、「改革開放と近代化の実践に立脚して、民族文化の優秀な伝統の発揚」を唱え、文化政策における伝統文化を評価している。[27] それまでの報告では、伝統文化を文化政策に含むことはなかった。「民族文化の優秀な伝統」という概念はその後、中国政府の文化政策の中でますます使用されるようになり、このことは、伝統文化に対する注目を表している。特に2002年に胡錦濤が主席になってからは、伝統文化に対する態度と政策の強化が著しくなる。2007年10月15日の中国共産党第十七次全国代表大会における胡錦濤の報告を見ると、2002年の第十六次全国代表大会報告と比べても、伝統文化に対してより積極的な態度が現われていることが分かる。2007年の報告では、文化一般は民族の団結力と創造力の源泉として重視されている。この文化観の一環として、中国の伝統文化の役割も全面的に評価されている。たとえば、伝統文化の中華民族における「精神家園」（精神的な故郷）の建設に対する役割が主張されており、「中華文化」は「中華民族の団結と進展の限りない原動力」であると評価されている。そのため、「中華の優秀な伝統文化の教育が強化され、近代科学技術の手段を用いて民族文化の豊かな資源の利用開発がなされる」べきだとも主張している。[28] この報告においては、社会統合と中華民族の精神的な故郷の建設にとって、伝統文化を「文化的資源」として積極的に活用すべきだという態度が表現されている。伝統文化がこれほど重視されるようになった背景には、胡錦濤が唱えている「和諧社会」建設の政策がある。

和諧社会概念は胡錦濤の「科学発展観」概念と共に、市場経済の導入に

よって生じているさまざまな社会問題への対策として唱えられている思想である。また、Luigi Tomba によると、和諧社会概念は体制の社会問題に対する消極的な態度としてだけではなく、国家が社会における精神的領域（道徳、倫理、行動）を支配構造の内部に入れようとする政策としてもとらえられる。[29]

2004 年以降、和諧社会の建設が積極的に唱えられるようになり、中国共産党の中心的な政策目標となった。2006 年 10 月 11 日の和諧社会概念に関する中心的な文書である「中共中央関於構建社会主義和諧社会若干重大問題的決定」を見ると、「和諧文化の建設」は和諧社会建設における重要な作業とされている。この文化建設の一部として「民族の優秀な文化伝統を発揚」することが指摘されている。この文書の「社会主義栄辱観の樹立と文明道徳を育成する」という節においては、伝統文化に関して、「我が国の伝統文化の中にある、社会の和諧に対して有利な内容を発揚し、伝統的美徳と時代精神の合致した道徳規範と行動規範を形成する」ことが課題として唱えられている。[30] 伝統文化は社会的調和を創造するための重要な資源として発見され、積極的に利用されるようになったのである。

以上において、清明節の法定休日化の一般的な背景を紹介した。伝統文化観における伝統行事の役割を見ると、重要な資料として、2005 年 6 月 17 日に中央宣伝部、中央文明辦、教育部、民政部と文化部の諸機関が出した、「関於運用伝統節日弘揚民族文化的優秀伝統的意見」（文明辦「2005」11 号）という意見書がある。この意見書は和諧社会概念の精神を受け入れて、[31] 愛国主義を中心とした民族精神の育成と社会主義文化の発展に対する伝統行事の有効性を唱えている。これは、2 年後の清明節の法定休日化へ向けての具体的な動きである。「関於運用伝統節日弘揚民族文化的優秀伝統的意見」は伝統行事の社会における役割に関して、次のように主張している：「中華民族の歴史の起源は古く、その歴史は長い。中国の伝統行事は中華民族の民族精神と民族感情を凝結したものであり、中華民族の文化の血脈と思想の精華を支えている。（伝統行事は）国家統一を維持し、民族の団結と社会和諧の重要な精神的なきずなをもたらすものであり、社会主義先進文化を建設するた

めの貴重な資源である[32]」。また、同じ資料は伝統行事を「鄧小平理論と「三個代表」重要思想を堅持し、社会主義和諧社会建設の要求に基づいて」行うべき事業として位置付けている。ここでは、清明節を含む伝統行事の社会統合と社会平和の建設に対する役割が全面的に主張され、伝統行事は民族を団結させる精神的・感情的力を持つとされている。伝統行事に対するこの見方には、伝統文化に重要な役割を見出す和諧社会概念に基づいた文化政策が反映されている。以上では、伝統文化と和諧社会概念との関係と伝統行事に対する期待を見た。この文化政策において、清明節は具体的にどう位置づけられているのかについて以下で注目したい。

文化政策における清明節の位置づけ

清明節に対する具体的な方針に関しては、民政部が2008年の清明節をきっかけとして設立したウェブサイト「文明掃墓　平安清明」が提供する情報が参考となる。このウェブサイトにおいて、清明節は次のように紹介されている：「(清明節）は祖先を祭る日である。……（この日に）祖先崇拝と共に（社会の）先人たちが追憶される。……今日まで、烈士陵園で革命烈士を追想（「懐念」）することが清明節の内容を豊かなものにしており、（中華民族の始祖とされる）黄帝と炎帝を祭ると同時に、自分の祖先を追想（「悼念」）し、先烈の偉大な功績を偲ぶことは今日の清明節活動の非常に重要な意義である[33]」。ここには、家庭内の祖先崇拝を国家の次元における烈士記念と黄炎両帝祭祀に結び付けることによって、清明節の祭祀文化こそが社会を統合させていくという発想が見られる。以前の家庭の祖先を排除した革命烈士記念日ではなく、家庭の次元と国家の次元を統合することが新しい清明節の公式的な性格となっている。この清明節観は、家庭の死者、国家の死者（革命烈士）と民族始祖に対する祭祀活動によって、全国をつなぐ「祭祀共同体」の成立を目的としている。

また、家庭と国家の死者たちに対する「感恩」を表現すべきであると主張されており、それは清明節の「祭祀共同体」の感情的内容となっている。た

とえば、民政部管理幹部学院の教授・楊根来は、「懐念」（死者を慕うこと）と「感恩」（死者に対して恩義を感じること）という感情が清明節の掃墓習慣の主な中身になっていると述べている。[34] また、2009 年 4 月 2 日の『人民日報』に掲載された「清明節　以更文明的方式祭奠」という記事は「感恩」と社会統合を具体的に関連付けている。記事の執筆者は、全国政治協商会議委員の李漢秋である。李は清明節の意義について、清明節は第一に生命に関する行事であると主張している。つまり、清明節は「すでに去った命を偲び、今ある命を奮い立たせる」。この生命概念こそが感謝の気持ちと結び付けられている。自分の亡くなった家族を記念し、生命を与えてくれた先人たちに感謝を表すと同時に、国家と民族のために命を犠牲にした烈士たちを偲び（「緬懐」）、今ある命が如何に過去の生命を引きついでいるかを考えるのが清明節だと李は述べる。「懐念」が中華民族の風俗として機能すれば、「人種（中華民族）の繁栄と価値共有認識の作用が起こる」と李は清明節の社会的意義を評価している。[35] この記事では、公式文化としての清明節において、祭祀活動、「感恩」の気持ちと社会統合の関係が如何に想定されているかがうかがえる。むろん、清明節において表現されるべき「感恩」の気持ちは国家に対する恩義につながると期待されていると考えられる。

以上の資料から分かるように、国家が創造しようとしている清明節においては、家庭において行われている祭祀、革命烈士に対する記念と中華民族の共同祖先とされている黄炎両帝の祭祀が統一され、生者が死者に対して感謝と恩義を表す祭祀共同体が生まれる。清明節と清明節における祖先祭祀は、私的空間と国家の公式空間をつなぐ文化政策の対象となっている。

近年の文化政策において伝統文化の役割が主張されているにもかかわらず、これは昔ながらの伝統文化の継承ではなく、共産党の方針にしたがって改革された「伝統文化」を指していることも明らかである。前に引用した胡錦濤の 2007 年の報告は、「全面的に祖国の伝統文化を認識して、その精華を受け入れて、その糟粕（かす）を取り去って、これを近代社会と適応させ、近代文明と協調させ、民族性を保持させ、時代性を体現させる」という態度を表明している。清明節の資料を見ても、祖先祭祀文化を改革した上で受け入れると

いう態度が現われている。清明節における祭掃から伝統陋習を排除し、祭奠（祭祀のこと）が先人の美徳を伝承できなければ、その意義が失われてしまうとも主張されている。[36] 国家が想定している清明節のイデオロギー的な役割は以上で明らかとなったが、中国政府が宣伝している祖先祭祀の内容は具体的に如何なるものであろうか。そして、具体的にどのような習慣が「糟粕」とされているのであろうか。

中国国家と清明節における祖先祭祀の実践

祖先祭祀の「改良」は清明節に対する政策の重要な一部となっている。結論からいえば、革命烈士に対する記念方式と共産党式の葬儀方式が家庭における祖先祭祀活動の模範として宣伝されている。それと同時に、「踏青」という出遊活動などの習慣も清明節の文化内容として宣伝され、公式文化としての清明節の世俗的な性格が強調されている。

中国政府の諸機関の中でも、特に民政部、文化部と中央文明辦は清明節の文化建設と管理に関わっている。民政部、文化部と中央文明辦の清明節に対する考え方の重点は多少異なるが、以下では、清明節に関して宣伝されている一般的な文化活動に触れた後で、主に清明節の祭祀文化に対する見方に注目したい。

祖先祭祀のみならず、清明節をめぐってはさまざまな文化活動が政府の諸機関によって宣伝されている。たとえば、2009年2月23日、中央文明辦が発布した「関於広泛開展“我們的節日・清明節”主題活動的通知」において、地方の諸機関が宣伝すべき清明節の活動として、古典の朗読会、革命烈士の「祭奠」、インターネット上の「英烈を祭る」活動と民俗文化活動の展開が唱えられている。民俗文化活動に関しては、人々が「伝統文化の魅力を感じるように」、凧あげの試合などを行うことが勧められている。[37]

また、中央宣伝部、公安部、住房城郷建設部、交通運輸鉄道部、工商総局、国家林業局の諸機関が2009年3月9日に発布した「関於做好文明祭掃平安清明相関工作的通知」においては、清明節活動に関して、「文明的な清明節

の世論」を形成するように唱えられ、「群衆が自然愛護と生命に対する尊重の意識を形成するように引導する」ことに宣伝活動の大きな課題が置かれている。清明節を政府が唱えている葬儀改革とその内容を宣伝する良い機会として利用することも主張されている[38]。清明節活動として、自然愛護、凧あげ、古典の朗読会等、あらゆる文化活動が推奨されている。だが、清明節の重要な文化内容である祖先祭祀が特に国家から注目されている。

民政部の「民政部関於做好 2008 年清明節期間有関工作的通知」を見ると、清明節に対して「社会の新風を唱導し、文明的な祭祀を引導する」ことが唱えられている。この「文明的な祭祀」とはどのような祭祀であろうか。「民政部関於做好 2008 年清明節期間有関工作的通知」は、地方の機関に対して「積極的に「家における祭祀」、「ネット上の祭祀」、「錯峰祭奠[39]」、「代理祭奠[40]」、「地区祭祀」と「集団祭祀」などの新しい祭祀形式を積極的に普及させ、群衆が自ら不合理な規定と陋習を除去し、低俗愚昧な行為を拒否するように導くこと」を求めている[41]。ここでは文明的な祭祀方式として、インターネット上の祭祀など、墓前とは異なる場所で行われる新しい方式が注目されていることが興味深い。

祖先祭祀活動に対する注目は、祭祀自体が和諧社会とつながるという発想とも関連している。「清明節伝統民族文化及其改良」という記事において、民政部管理幹部学院の教授である楊根来は、現代中国における清明節の意義について述べている。毎年清明節になると、人々は必ず哀悼の気持ちを起こし、故人たちのことを想いおこす。人々は死者たちの墓に参り、墓を掃除し、故人を懐かしく思う気持ち（「懐念之情」）を表現する。「中華民族の祖先祭祀はしばしば郊外で行なわれているので、人々は掃墓と屋外での遊びを一緒にして、先人を偲び、情操を陶冶し、心身の健康と社会の和諧を推し進めている」と楊は述べる[42]。ここで祭祀活動は、道徳的活動として社会における和諧と結び付けられている。祖先祭祀によって、社会全体が調和するとされている。だが、それは従来の伝統的な祖先崇拝の習慣ではなく、政府に指定された祭祀実践でなければならない。では、政府は祖先祭祀に関してどのような実践を宣伝しているのであろうか。

民政部の副部長竇玉沛は、2008年4月のインターネット上の会見において、正統的な祭祀活動について詳細に言及している：「清明節に祖先を祭祀する際、伝統的な文化のあり方が見られると同時に、封建的な迷信の出現も見られる。焼紙や線香を焚き、供え物を並べるという文明的ではない、環境を保護しない問題が……集中的にこの時期に出現する可能性があることは、私たちの仕事に対して大きな要求を課すものとなっている。」竇は「文明的で健康な」葬儀習俗として、「黒い喪章と白い花を伝統的な喪服の代替物として用い、お辞儀（「鞠躬」）と黙祷（「黙哀」）を跪いて頭を地面に打ちつけてお礼する（「磕頭跪拝」）習慣に代わるものとして用い、哀悼の音楽の放送をラッパと太鼓による伝統的な喪服音楽を奏でること（「吹吹打打」）の代替物として用いる」ことを主張し、政府の理想的な祭祀の方式を描いている。花以外、正統的な供え物として茶、酒と軽やかな音楽を挙げている。また、「特に焼紙化銭、焚香放炮（爆竹）などによって引き起こされている環境汚染と火災弊害を除去しなければならない」と主張し、改革の対象として焼紙の習慣を取り上げている。しかし、竇は習俗の改革において強制的な手段を用いることはできないとも主張し、たえず宣伝を行い、唱導し、人々を導くことによって目的を達成すべきだと述べている。[43]

民政部が設立した「文明祭掃　平安清明」という清明節関連のサイトに見られる「清明祭掃在文明」という記事も、国家の祭祀実践観を代表するものとして取り上げることができる。この記事は、清明節の「祭掃」（祭祀のこと）が「文明的」でなければならないことを主張し、文明的な祖先祭祀方式を次のように描いている：「先人に対する最もよい祭祀（の方式）としては、先人の遺志を継承し、仕事で頑張ることによって、社会に貢献すること以外にはない。精神的な追想、「黙哀」、植樹、花を献上すること、歌をささげることや、先人の墓の前でお辞儀し、静かに哀悼の気持ちと懐かしい思いを表現することは、誠実で厳粛である。植樹によって、故人を祭り、追想を緑色に染めることが環境保護にとって有利である。花束を献上することで亡くなった親戚を悼むことは、文明的で上品である。歌をささげることによって哀惜の念を表し、音楽を用いて誠実で深い情を伝えることは顔に感じる穏や

かな風となり、空一杯の濃い煙といたるところに散らばっている（冥幣と冥品の）灰を少なくする。[44]」

これで、中国国家が目指す清明節の内容と祭祀実践が見えてくる。明代と中華民国期の資料に現われている描写と比べると、共産党政権は大きく異なる祭祀文化を唱えていることが分かる。公式文化としての清明節は、社会工学的な政策として、中国国家の世俗的な世界観を家庭における祖先祭祀の中へ拡張しようとする。だが、この拡張は強制的にではなく、教育と教化によって、実行されるべきものとされている。以上で取り上げた資料に見られる具体的な祖先祭祀観は、祭祀実践に対する方針において、国家の文明化政策と唯物主義の世界観を唱える点で合致している。中国国家の清明節は世俗化された祖先崇拝の行事となっている。清明節では、他界と祖先ではなく、この世における生命が重視されており、生者が故人に対して表すべき恩義の気持ちが主張されている。派手な伝統祭祀方式ではなく、静かに哀悼と記念の気持ちを表す方式が理想視されている。屋外への出遊や古典の朗読会などの活動も清明節の世俗的な性格を強めている。[45] 国家の資料において「祭祀」や「祭奠」という言葉が使われているが、その中身は他界にいる祖先を前提とする宇宙観ではなく、むしろ「記念」するという世俗的なニュアンスで使われている。つまり、共産党政権が宣伝している祖先祭祀の実践は中国共党式の葬儀方式に基づいている。共産党式の葬儀における儀礼の特徴としては、儀礼の簡素化があり、その実践としてお辞儀、献花と黒腕章を着けることがある。また、共産党式の葬儀においては、他界の存在が否定され、故人の社会に対する貢献が注目されており、死ではなく、生命が重視されている。[46] 清明節と祖先崇拝は言説の上では伝統文化として評価されているが、政府が目指しているのは「厳粛」で世俗的な記念行為だといえよう。「文明的」「厳粛」でないとされる祭祀行為はが排除されるべきだと主張される。他界を前提とする習慣こそがこの祭祀習俗の改革の的となる。そして、清明節における焼紙がその代表的な習慣として特に国家の注目を集めている。

祖先祭祀における焼紙と国家

祖先祭祀の実践に注目する資料のほとんどは焼紙に言及し、この習慣を「封建迷信」や「陋習」として批判している。国家の言説において、焼紙の習慣が批判されている理由はいくつかある。焼紙による火災の危険性がその一つである。もう一つは浪費である。紙を燃やす行為は資源の無駄使いとして否定されている。しかし、焼紙は他界の存在を前提とする習慣として、「迷信」という枠組みに入れられて、批判されている側面が大きい。焼紙が代表する死生観は中国国家が建設しようとする祭祀文化とそれに代表される唯物主義的な死生観に反するものとして排除すべき対象となっている。焼紙は生者と死者の積極的な交流を前提としており、能動的な祖先がいるという死生観を具体的な形で体現しているからである。

焼紙の習慣は国家によって否定されている習慣であるが、多くの場合に黙認されているのが実状である。[47] 1997年発行の葬儀管理条例（「殯葬管理条例」）では、「封建迷信の喪葬用品」の製作と販売が禁止されているが、現実には売店で簡単に手に入る。[48] しかし、これは決して、この習慣に対する国家の承認を意味しない。近年において、焼紙に対する国家の態度は厳しくなっている。2006年4月、国家民政部の副部長竇玉沛が成都市で開催された全国殯葬工作会議において、紙製の「別墅」（別荘）、「二奶」（お妾）、「轎車」（リムジン）の「祭奠品」を迷信性の濃い「めちゃくちゃ」（「乱七八糟」）なものと呼び、これらに対して強い反対を表明した。そして、法律上これらの祭品をより厳しく統制するように法案を提出することを言明した。[49] また、国務院辦公庁が2008年の清明節をきっかけとして、各工商行政管理部が葬儀市場の管理と「封建祭祀用品」の違法販売に対する取り締まりを強める命令を出している。[50] 2007年5月14日、国務院法制辦公室が「殯葬管理条例（修訂草案征求意見稿）」という法案を発表し、指定場所以外でこれらの「喪葬用品」を燃やすこととこれらの用品を作製販売することを明確に禁止しようとしている。これは、焼紙の習慣に対する統制の意識が高まり、国家によって問題視されていることを表しているが、2009年9月現在ではこの法案は

まだ施行されていない[51]。また、国家が強制的な手段によってこの焼紙を排除しようとしないことは 1982 年の改革開放期における宗教政策を要約した「文件 19 号」に従った態度である[52]。しかし、祭祀習慣の改革は依然として、中国政府の最終目標として位置づけられている。

4. 結論

以上の通り、近年の公式文化としての清明節とその思想的背景を見てきた。現代中国は変わりつつある複雑な文化空間を持っている。改革開放以降、民間信仰の復活が見られると同時に、依然として積極的に中国人の文化実践を形成しようとする国家の姿もうかがえる。新しい現象として、国家の伝統文化に対する積極的な評価が見られる。清明節の法定休日化は、この背景のもとで行われたものである。清明節を全国の休日にすることによって、中国政府は清明節を国家の影響圏に取り込もうとしている。これは、家庭における祖先祭祀を否定し、その代わりに革命烈士に対する忠誠を人々に植え付けることを目的としていた以前の態度と大きく異なっている。だが、国家は伝統文化をそのまま承認したわけではなく、伝統文化が結局は社会統合と社会工学的な道具とされていることも以上の分析から明らかである。国家は清明節を「優秀な民族伝統」として評価しながらも、その中身を見ると、祖先崇拝に対する実質的な態度の変更は見られない。国家が以前から唱えている世俗的な世界観こそが清明節の中身となり、祖先祭祀における実践を形成させる文化内容として想定されている。清明節の法定休日化は、伝統的な祖先祭祀とそれに伴う宇宙観に対する承認を意味しない。社会統合の手段として、祖先崇拝は表面的に評価されているが、祭祀の具体的な方式はあくまで「文明化」の対象として位置づけられている。これによって、国家は家庭における祖先祭祀実践の次元に介入しようとしているのである。祖先崇拝の問題は和諧社会建設政策の文脈の中に位置づけられており、改革開放期の中国文化政策の中へ統合されてしまっている。

1980 年代の研究とは異なり、近年における多くの研究は、復活しつつあ

る民間信仰と伝統文化の力に注目している[53]。だが、民衆が国家の政策をそのままで受け入れることはほとんど見られないにもかかわらず、国家が影響力を持っていないというわけではない。先行研究を見ると、国家の政策が人々の死と死者との触れ合い方に対して具体的な影響を与えている場合も見られる。たとえば、国家が葬儀改革の一部として唱えている火葬の推進は改革開放期以降、成果を上げつつある。また祭祀実践に関して、上海のある公共墓地では、冥幣と冥品を焼く習慣の代わりに、献花の習慣が一般化しているという報告もある[54]。国家の文化政策は現代中国における死生観を形成する一つの力として注目すべきものである。

以上で見てきた通り、祖先崇拝における祭祀方式も国家の文化政策の対象となっている。教育と教化で、国家は焼紙などの祖先祭祀の実践を「改良」することを通じて、死生観と他界観に対して影響を与える力を持っている。今後、焼紙に対する教化活動が成果を挙げれば、それは直接この習慣に代表される他界観と死生観に介入することを意味しかねない。清明節は、国家の政策と民間信仰の実践という二つの次元が絡み合う接点となっているのである。国家の方針に従って紙銭や家を花に代替することは、祖先は生者から紙銭などを送ってもらう必要があるという他界観と死生観に如何なる影響を与えるのであろうか。国家と民間の間の力学に注目し、中国人がこの文化的な二つの極の間でさまざまな形で死生観を形成していくことに、さらに注目しなければならない。

■註

1 Watson, Rubie S., 1994, "Making Secret Histories - Memory and Mourning in Post-Mao China," Rubie S. Watson ed., *Memory, History, and Opposition Under State Socialism*, Santa Fe, N.M.: School of American Research Press, 65-85. ここでは 68-9 頁を参照。

2 Anagnost, Ann, 1997, *National Past-Times - Narrative, Representation, and Power in Modern China*, Durham & London: Duke University Press, 75 頁。

3 私はこの論文において「清明節の復活」という言葉を使っているが、これは民間における清明節ではなく、あくまで国家で定められている公式文化としての復活のみを指

している。

4 清明節が法定休日になる以前から多くの中国人は墓参し、祭祀を行っていた。民政部によると、たとえば2007年には、上海と北京はそれぞれ700万人と190万人が各種の祭祀活動に参加したとされている（http://cbzs.mca.gov.cn/article/shxw/yw/200803/20030300012431.shtml, 2009.9.2）。2008年の数字は民政部が提供している（http://www.mca.gov.cn/article/zwgk/mzyw/200804/20080400013266.shtml, 2009.9.2）。2008年の北京の60万人は前年の3倍である。2009年の数字は「清明節期間逾4億人次参加祭掃」（http://news.xinhuanet.com/newscenter/2009-04/06/content_11139733.htm, 2009.9.2）を参照。

5 民衆が国家の文化政策を受け入れているか否か、もし受け入れているとすれば如何に受け入れているのかという問題は、機会を改めて論じたい。本論文の目的は体制側の清明節観の検討にある。

6 Jankowiak, William R., 1993, *Sex, Death, and Hierarchy in a Chinese City - An Anthropological Account*, New York: Columbia University Press, 特に264-5頁。

7 Whyte, Martin King and William L. Parish, 1984, *Urban Life in Contemporary China*, Chicago: University of Chicago Press, 321頁を参照。

8 清明節の際に行われている祖先崇拝を死生観の有無と結びつけないで、それらの実践を「伝統」や「習慣」として見なす観点も可能である。だが、近年行われたアンケート調査によると、中国の漢民族人口の20%以上は祖先の影響を経験したことがあると答え、25%弱は祖先崇拝によって、祖先の保護を得られると信じていることが指摘できる。このデータを考えると、単なる伝統や習慣として、清明節の祖先崇拝を行う人の存在を認めるとしても、特定の死生観を持って清明節に参加する人々の数も少なくないと推測できる。Yao, Xinzhong and Paul Badham, 2007, *Religious Experience in Contemporary China*, Cardiff: University of Wales Press, 34頁と60頁を参照。

9 中村喬, 1988,『中国の年中行事』, 平凡社, 104頁。

10 『帝京景物略』の引用は羅啓栄・陽仁煊編著, 1986,『中国伝統節日』, 科学普及出版社の115頁にある。

11 陳楨修, 李蘭増, 陳徳沛纂, 1922,「民国文安県志」,『中国地方志集成 河北府県志輯29』, 2006, 上海書店出版社, 168頁。

12 中村喬, 1988,『中国の年中行事』, 79頁と107頁以降。

13 中村喬（『中国の年中行事』、106頁）によると、明清朝以前は清明節の際、「禁火」

と呼ばれる火を用いないという習慣があり、冥幣を焚化しないで、紙銭をお墓の上に置くだけにしていた。だが、冥幣や冥品を焼かないと、冥界に達さないため、別の日に焼いていたようである。冥幣を焚化しないという習慣は、明朝に入ってからなくなったと中村は指摘している。

14 渡辺欣雄 , 2003,「あの世のために生きる――漢族の死生観と死の条件」『アジア遊学』58: 14-23。引用は 14 頁にある。

15 同上 , 18 頁。

16 渡邊欣雄 , 1991,『漢民族の宗教 : 社会人類学的研究』, 第一書房 , 140 頁。

17 Scott, Janet Lee, 2007, *For Gods, Ghosts and Ancestors - The Chinese Tradition of Paper Offerings*, Hong Kong: Hong Kong University Press, 105 頁を参照。

18 Watson, Rubie S., 1994, "Making Secret Histories - Memory and Mourning in Post-Mao China," 76 頁。 清明節に対する否定的な態度の背景には、宗族による墓前の祖先祭祀は宗族の団結を強める効果を持っており、共産党政権によって危険視されていたこともあるようである。(Freedman, Maurice, 1971, *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*, New York: Humanities Press, 180-2 頁を参照)

19 Hung, Chang-tai, 2008, "The Cult of the Red Martyr: Politics of Commemoration in China," *Journal of Contemporary History*, vol. 43 (2): 279-304. ここでは特に 283-4 頁を参照。

20 Feuchtwang, Stephan and Wang Mingming, 1991, "The Politics of Culture or A Contest of Histories: Representations of Chinese Popular Religion," *Dialectial Anthropology*, 16 (2-4): 251-72. ここでは特に 263-4 頁を参照。

21 Sautman, Barry, 1997, "Myths of Descent, Racial Nationalism and Ethnic Minorities in the People's Republic of China," Frank Dikoetter ed., *The Construction of Racial Identities in China and Japan*, London: Hurst and Company, 75-95. ここでは特に 79-80 頁を参照。中華民国期には、黄帝の祭祀は清明の日に行われていたが、共産党政権の成立に伴って、この習慣は途絶えた。

22 たとえば、1986 年に刊行された、『中国伝統節日』という中国伝統行事を紹介する本において、清明節については次の描写がある :「(1949 年の) 解放以降、清明節になると、人々が続々と烈士陵園へ行き、お墓をきれいにして、革命烈士の高貴な人品を回想して、哀悼の気持ちを表し、革命烈士から学ぶ。これは (社会にとって) 非常に必要なことである。封建迷信のものについていえば、我々はこれを棄てなければならない。この千百年間伝承されてきている行事の際、人類の文明と自由や解放のために

身を捧げた烈士たちに花の束を献上することによって我々の哀悼の気持ちを表し、祖先に対する尊敬を尽くすことは有意義なことではあるまいか」（羅啓栄・陽仁煊編著，1986,『中国伝統節日』, 116 頁）。

23 『人民日報』を見ると、2000 年代に入るまで、革命烈士記念を別にして、民間における清明節に言及する記事はほとんど見られない。その例外は、清明節において行われている焼紙などの「陋習」を批判する記事である（たとえば、「清明時節紙灰多」,『人民日報』, 2000 年 4 月 6 日）。

24 中華人民共和国における「部」という行政機関は日本の「省」に当たる。中央文明辦は 1997 年に部レベルにおいて設立された独立機関であり、文化政策と宣伝政策に関わっている。

25 清明節は全国休日（「全体公民放假的節日」）と別に存在している少数民族休日（「少数民族習慣的節日」）という枠組みに属していないことは、清明節が漢民族のみの休日ではなく、中国のすべての民族の休日となっていることを意味している。これは中国公式文化に対する漢民族の強い影響を示している。国務院 , 2007,「国務院関於修改「全国年節及記念日放假」的決定」（http://www.gov.cn/fwxx/zgjr/content_804010.htm, 2009.7.28）

26 国務院 , 2006,「国務院関於公布第一批国家級非物質文化遺産名録的通知」（http://www.gov.cn/zwgk/2006-06/02/content_297946.htm, 2009.8.4）

27 江沢民 , 2002,「中国共産党第十六次全国代表大会報告」,（http://news.xinhuanet.com/newscenter/2005-01/16/content_2467733.htm, 2009.8.4）。江沢民の 1997 年の「中国共産党第十五次全国代表大会報告」を見ると、伝統文化についての直接な言及はみられない（http://cpc.people.com.cn/GB/64162/64168/64568/65445/4526285.html, 2009.8.4）。

28 胡錦濤 , 2007,「高挙中国特色社会主義偉大旗幟　為奪取全面建設小康社会新勝利而奮闘 ― 在中国共産党第十七次全国代表大会上的報告」（http://news.xinhuanet.com/newscenter/2007-10/24/content_6938568_6.htm, 2009.8.8）

29 Tomba, Luigi, 2009, "Of Quality, Harmony, and Community: Civilization and the Middle Class in Urban China," *Positions: East Asian Cultures Critique*, 17 (3): 591-616. 特に 593 頁と 600 頁を参照。

30 中国共産党第十六届中央委員会第六次全体会議 ,「中共中央関於構建社会主義和諧社会若干重大問題的決定」（http://theory.people.com.cn/GB/41038/4933660.html, 2009.8.10）

31 この意見書は2002年の中国共産党第十六次全国代表会、2003年と2004年の十六届三中（中国共産党中央委員会第三次全体会議）と四中（中国共産党中央委員会第四次全体会議）の精神を受け入れていると述べている。2004年の中国共産党中央委員会第三次全体会議において、和諧社会概念が重要な政策方針となったことを考えると、この文書における伝統行事と和諧社会概念の関係は明らかだと思われる。

32 中央宣伝部，中央文明辦，教育部，民政部，文化部，2005,「関於運用伝統節日弘揚民族文化的優秀伝統的意見」（http://www.godpp.gov.cn/zlzx/2005-06/23/content_4501650.htm, 2009.8.8）

33 新華網，「清明節的含義」（2008年3月28日）（http://mzzt.mca.gov.cn/article/qmjzt/qmxs/200803/20080300012952.shtml, 2009.8.9）

34 楊根来，2008,「清明節伝統民族文化及其改良」,（http://mzzt.mca.gov.cn/article//qmjzt/llyj/200803/20080300012532.shtml, 2009.7.25）

35 李漢秋，2009,「清明節　以更文明的方式祭奠」,『人民日報』,（http://society.people.com.cn/GB/9067757.html, 2009.7.9）

36 魏志華，2009,「清明祭掃貴在文明」,（http://mzzt.mca.gov.cn/article/ljqmjzt/llyj/200903/20090300028970.shtml, 2009.7.26）。伝統文化の「糟粕」を取り除き、その「精華」を吸収するという態度は以前から中国共産党の文化政策の一部をなしている。たとえば、毛澤東の『新民主主義論』（1951, 北京師範大学出版部）を参照。

37 中央文明辦，2009,「関於広泛開展“我們的節日・清明節”主題活動的通知」,（http://www.wenming.cn/gzyd/2009-03/04/content_15863454.html, 2009.8.2）

38 中央宣伝部，公安部，住房城鄉建設部，交通運輸鉄道部，工商総局，国家林業局，2009,「関於做好文明祭掃平安清明相関工作的通知」,（http://www.china.com.cn/policy/txt/2009-03/19/content_17466802.htm, 2009.8.3）。共産党政権が行っている葬儀改革は土葬の排除と火葬化をその基本目的としている。その中間目的としては土葬を公共墓地に集中することである。実践においては葬儀習慣の文明化も葬儀改革の目的である。（中国殯葬協会，「中国現代殯葬概況」, http://bzxh.mca.gov.cn/link.asp, 2009.8.3）

39 人々が同時に墓参を行うのではなく、時間をずらして墓参するという祭祀方式を指している。

40 自分で墓参を行わないで、代理者によって行ってもらうという墓参方式を指している。

41 民政部，2008,「民政部関於做好2008年清明節期間有関工作的通知」,（http://www.mca.gov.cn/article/zwgk/tzl/200803/20080300012655.shtml, 2009.8.3）

42 楊根来 , 2008,「清明節伝統民族文化及其改良」, (http://mzzt.mca.gov.cn/article//qmjzt/llyj/200803/20080300012532.shtml, 2009.7.25)

43 民政部 , 2008,「窫玉沛副部長在線談“文明祭掃、平安清明”」(http://www.mca.gov.cn/article/mxht/ftzb/zxft/200804/20080400013188.shtml, 2009.7.21)

44 魏志華 , 2009,「清明祭掃貴在文明」, (http://mzzt.mca.gov.cn/article/ljqmjzt/llyj/200903/20090300028970.shtml, 2009.7.17)

45 「踏青」は昔も行われていたが、現在の中国政府の文化政策のコンテキストの中で清明節を「世俗的」な行事として位置づける役割を担っている。

46 Whyte, Martin King, 1990, "Death in the People's Republic of China," James L. Watson and Elizabeth Rawski eds., *Death Ritual in Late Imperial and Modern China*, Berkeley: University of California Press, 289-316. ここでは特に 292-5 頁を参照。民政部の清明節サイトにある唯一の直接死生問題に関する記事は、死を完全に生物学的な生命の終わりとして位置づけていることも示唆的である。(陳蓉霞 , 2004,「生死不分離－死亡是一種過程」, http://mzzt.mca.gov.cn/article/qmjzt/llyj/200711/20071110003694.shtml, 2009.8.10)

47 村田和彦 , 2003,「国家政策と漢族の葬儀」『アジア遊学』58: 24-35。ここでは 33-4 頁を参照。

48 1997 年の「殯葬管理条例」では「封建迷信の喪葬用品」の製作と販売が禁止されている。(http://www.gov.cn/jrzg/2007-05/14/content_614070, 2009.8.31)

49 『北京晨報』, 2006 年 4 月 25 日 ,「民政部：祭品出現“別墅”“二奶”等将被査処」, (http://news.xinhuanet.com/legal/2006-04/25/content_4469980.htm, 2009.9.3)

50 国務院辦公庁 2008 年 3 月 23 日発布の「国務院辦公庁関於做好清明節期間文明祭掃安全保障工作的通知」, (http://www.gov.cn/zwgk/2008-03/24/content_927214.htm, 2009.7.15)。地方において、罰金などの手段によって、積極的に公式な場所から焼紙の習慣を除去しようとする例も見られる。(たとえば、「包頭立法禁止乱焼紙」, http://news.sina.com.cn/c/2006-04-03/12358601138s.shtml, 2009.9.4)

51 国務院法制辦公室 , 2007,「殯葬管理条例（修訂草案征求意見稿）」, (http://fss.mca.gov.cn/article/gzdt/200711/20071100003883.shtml, 2009.9.4)

52 1982 年 3 月 31 日の文書「関於我国社会主義時期宗教問題的基本観点和基本政策」(所謂「文件 19 号」) は改革開放期の宗教政策を表している。宗教の消滅が依然として将来の最終目標として位置づけられ、迷信行為は依然として反対されているが、この目

標を達成するための強制的な方法は否定されている。この方針に従って、迷信行為に対する柔軟な態度が見られる。「道会門」などの組織に対しての厳しい取り締まりが唱えられているにもかかわらず、観相などの行為を行っている人達に対しては教育などの対策が推薦されている。(徐玉成，1997,『宗教政策法律知識問答』, 中国社会科学出版社，504 頁) 焼紙に対する政策もこの柔軟策の一環として理解しなければならない。焼紙などの習慣の消滅は最終的な狙いではあるが、強制的にではなく、教化と教育活動によってなくすべきだということである。

53 民間信仰の復活に関して、この捉え方の近年の一例は Adam Yuet Chau の *Miraculous Response - Doing Popular Religion in Contemporary China*, 2006, Stanford: Stanford University Press である。

54 改革開放以降の火葬率の向上について言及する論文として、Mayfair Mei-Hui Yang の "Spatial Struggles: Postcolonial Complex, State Disenchantment, and Popular Reappropriation of Space in Rural Southeast China," *The Journal of Asian Studies*, 63 (3): 719-55 頁と Charlotte Ikels の "Serving the Ancestors, Serving the State: Filial Piety and Death Ritual in Contemporary Guangzhou," Ikels, Charlotte ed., 2004, *Filial Piety - Practice and Discourse in Contemporary Asia*, Stanford: Stanford University Press, 88-105 頁を参照。上海の公共墓地の例：村田和彦，2003,「国家政策と漢族の葬儀」, 32-3 頁。また注 29 において紹介した Tomba の論文も、国家が和諧社会建設政策と関連して唱える倫理観と価値観を都市部の中流階級が取り入れていると指摘する。これは、国家の文化政策が市民の主体形成に及ぼす影響力をうかがわせるものである。

(エリック・シッケタンツ　東京大学人文社会系研究科宗教学宗教史学博士課程)

The Revival of the Tomb Sweeping Festival (Qingmingjie) in the People's Republic of China: Grave-based Ancestor Worship and the Cultural Policies of the Chinese Communist Party

Erik Schicketanz

This article discusses the recent revival of the Tomb Sweeping Festival (Qingmingjie) as a national holiday in the People's Republic of China. While the Tomb Sweeping Festival, an important occasion in Chinese ancestor worship, has experienced a steady popular revival since the reform period, the fact that it became a national holiday in 2008 seems to also mark a changed attitude of the Chinese state towards traditional culture. This article analyzes the ideas that constitute the background of the institution of the Tomb Sweeping Festival as an official holiday by the Chinese Communist Party (CCP). The article shows that the concept of the "harmonious society" (*hexie shehui*) propagated by General Secretary Hu Jintao forms the direct background to the current reevaluation of traditional culture by the Chinese state. Traditional culture is perceived to be able to provide shared values and a common culture that can counter the negative social effects of the introduction of a market economic system. The official Tomb Sweeping Festival combines domestic ancestor worship with reverence for revolutionary martyrs and the mythical founders of the Chinese people, the Yellow Emperor and the Red Emperor, creating a ritual community that integrates the domestic with the national.

While traditional culture is increasingly integrated into the cultural policies of the CCP, this does not mean that cultural practices such as ancestor worship are actively acknowledged by the Chinese state in their traditional form. To the contrary, the officially sanctioned Tomb Sweeping Festival is founded on

the transformation of traditional practices of ancestor worship. A secular form of commemoration, in particular modeled on commemorative practices for revolutionary martyrs, is to function as the template for ancestor worship. Practices such as the burning of paper offerings for ancestors (*shaozhi*), which are based on the idea of a reciprocal relationship between the living and the dead, are to be replaced by practices that do not posit the ancestors as active entities and propagate a secular worldview.

The officially sanctioned Tomb Sweeping Festival thus forms part of ongoing attempts by the state to bind traditional culture closer to party interests while simultaneously seeking to transform traditional culture according to the CCP's secular worldview.